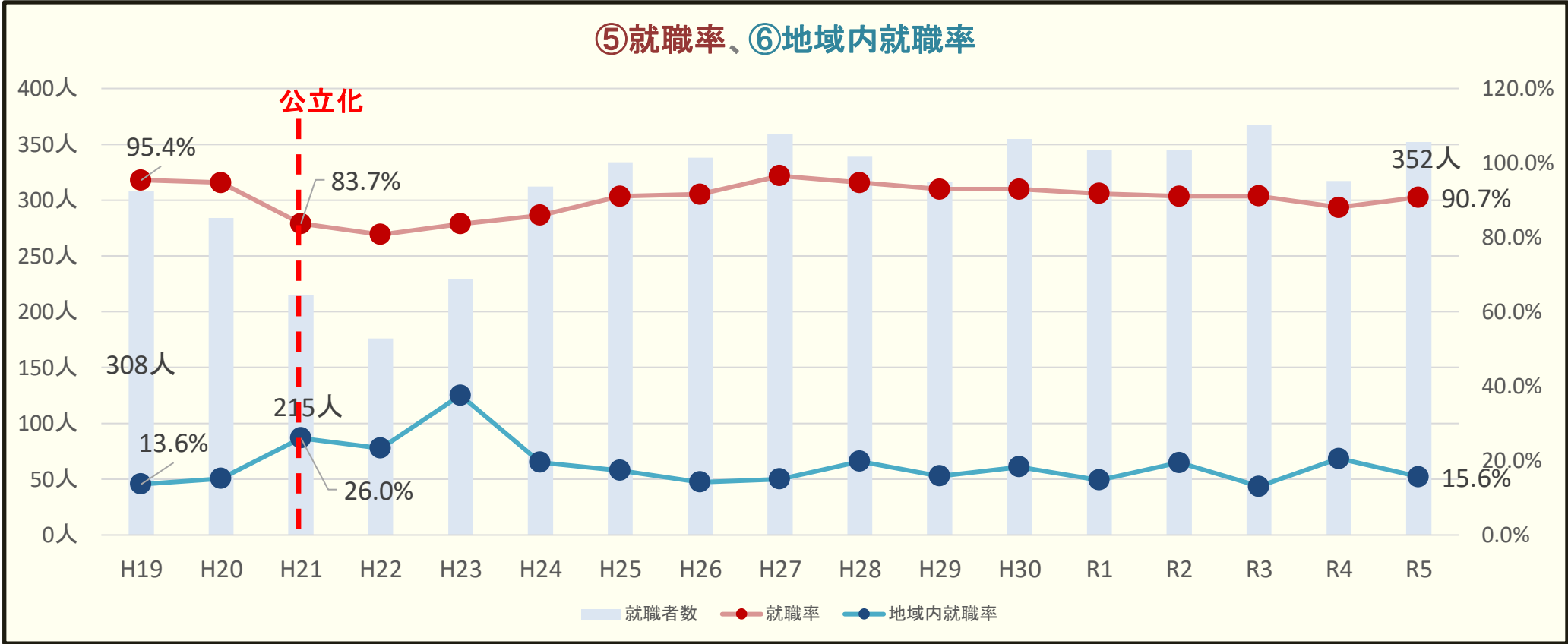
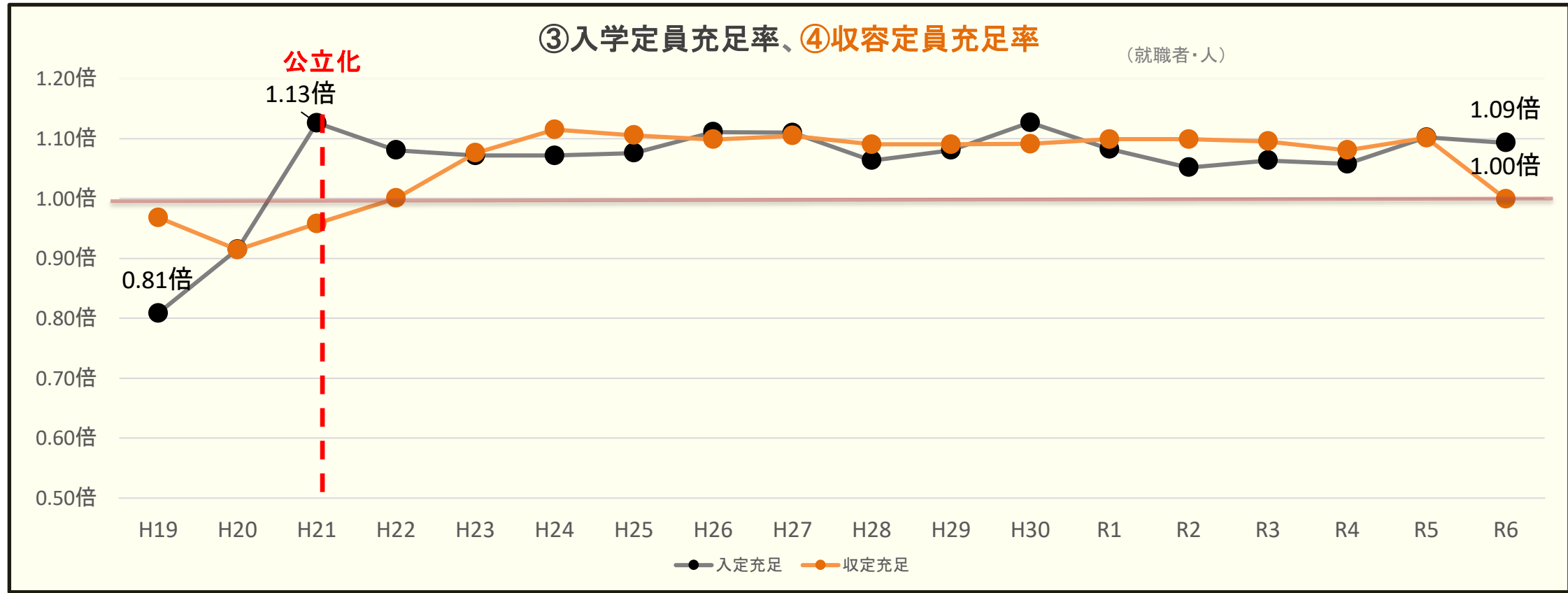
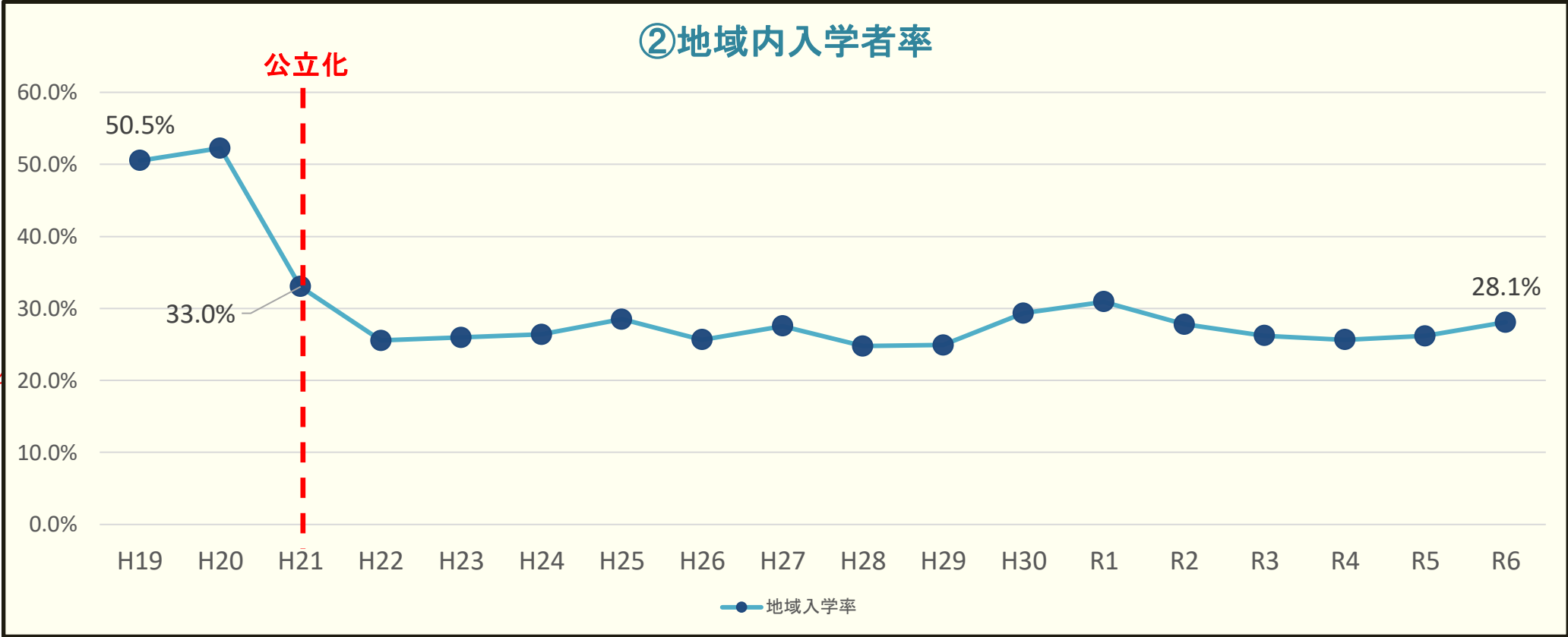
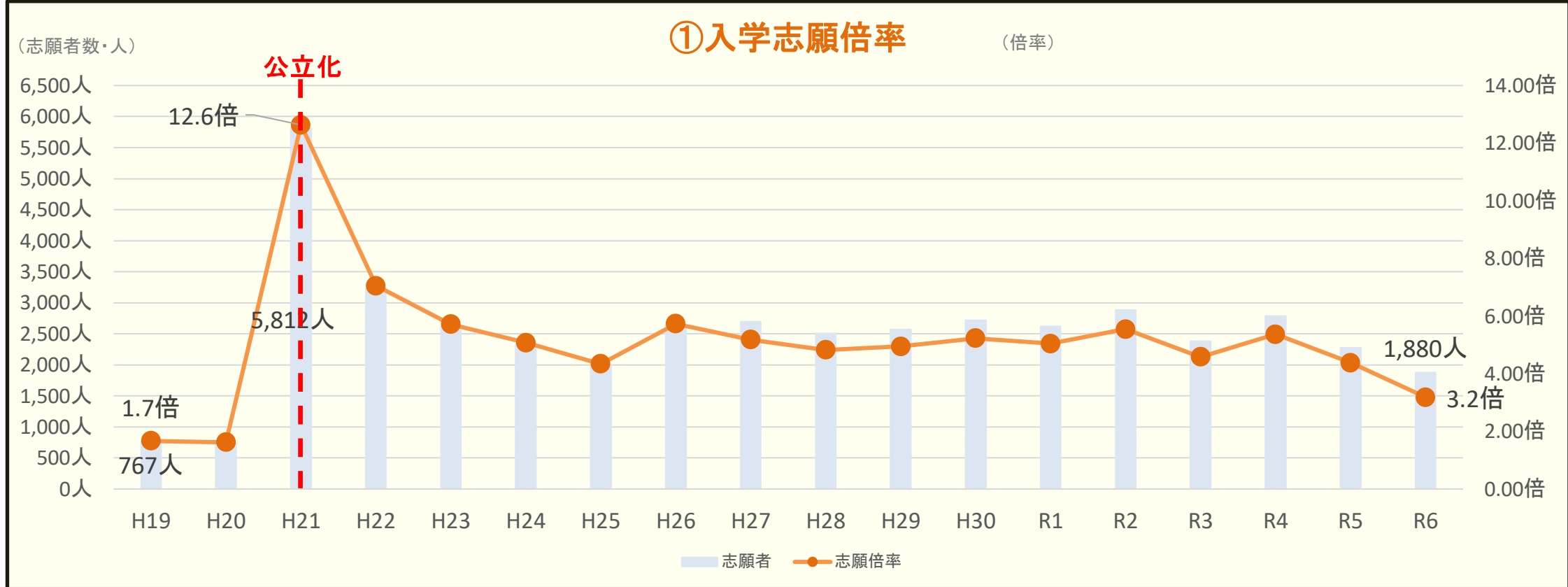


高知工科大学	設立団体	開学年	法人設立年
	高知県	平成9年	平成21年

I. 公立化効果(地域への貢献度合い)に関する指標

	公立化2年前 H19	前年 H20	公立化初年度 H21	2年目 H22	3年目 H23	4年目 H24	5年目 H25	6年目 H26	7年目 H27	8年目 H28	9年目 H29	10年目 H30	11年目 R1	12年目 R2	13年目 R3	14年目 R4	15年目 R5	16年目 R6
①入学志願倍率 (a / b)	1.7倍	1.6倍	12.6倍	7.0倍	5.7倍	5.1倍	4.3倍	5.7倍	5.2倍	4.8倍	4.9倍	5.2倍	5.0倍	5.6倍	4.6倍	5.4倍	4.4倍	3.2倍
・志願者 (a)	767人	745人	5,812人	3,242人	2,631人	2,335人	1,996人	2,637人	2,696人	2,510人	2,572人	2,718人	2,624人	2,886人	2,384人	2,790人	2,280人	1,880人
・募集人員 (b)	460人	460人	460人	460人	460人	460人	460人	460人	520人	520人	520人	520人	520人	520人	520人	520人	520人	590人
②地域内入学者率 (c / d)	50.5%	52.3%	33.0%	25.6%	26.0%	26.4%	28.5%	25.6%	27.6%	24.8%	24.9%	29.4%	30.9%	27.8%	26.2%	25.6%	26.2%	28.1%
・設立団体の地域内入学者 (c)	188人	220人	171人	127人	128人	130人	141人	131人	159人	137人	140人	172人	174人	152人	145人	141人	150人	181人
・入学者 (d)	372人	421人	518人	497人	493人	493人	495人	511人	577人	553人	562人	586人	563人	547人	553人	550人	573人	645人
③入学定員充足率 (d / b)	0.81倍	0.92倍	1.13倍	1.08倍	1.07倍	1.07倍	1.08倍	1.11倍	1.11倍	1.06倍	1.08倍	1.13倍	1.08倍	1.05倍	1.06倍	1.06倍	1.10倍	1.09倍
④収容定員充足率 (f / g)	0.97倍	0.91倍	0.96倍	1.00倍	1.08倍	1.12倍	1.11倍	1.10倍	1.10倍	1.09倍	1.09倍	1.09倍	1.10倍	1.10倍	1.10倍	1.08倍	1.10倍	1.00倍
・在籍者 (f)	1,801人	1,701人	1,782人	1,861人	2,001人	2,074人	2,056人	2,043人	2,121人	2,159人	2,224人	2,291人	2,308人	2,308人	2,300人	2,269人	2,302人	2,358人
・収容定員 (g)	1,860人	1,860人	1,860人	1,860人	1,860人	1,860人	1,860人	1,860人	1,920人	1,980人	2,040人	2,100人	2,100人	2,100人	2,100人	2,100人	2,090人	2,360人
⑤就職率 (i / (h-j))	95.4%	94.7%	83.7%	80.7%	83.6%	86.0%	91.0%	91.6%	96.5%	94.7%	92.9%	92.9%	91.8%	91.0%	91.1%	88.1%	90.7%	
・卒業者 (h)	477人	403人	381人	304人	361人	485人	478人	467人	484人	470人	485人	515人	519人	513人	522人	483人	509人	
・就職者(i)	308人	284人	215人	176人	229人	312人	334人	338人	359人	339人	316人	355人	345人	345人	367人	317人	352人	
・進学者(j)	154人	103人	124人	86人	87人	122人	111人	98人	112人	112人	145人	133人	143人	134人	119人	123人	121人	
⑥地域内就職率 (k / i)	13.6%	15.1%	26.0%	23.3%	37.6%	19.6%	17.4%	14.2%	15.0%	19.8%	15.8%	18.3%	14.8%	19.4%	13.1%	20.5%	15.6%	
・設立団体の地域内就職者数 (k)	42人	43人	56人	41人	86人	61人	58人	48人	54人	67人	50人	65人	51人	67人	48人	65人	55人	

※ ①～④の各項目は、学部の数値を集計。
※ ①②⑤⑥の数値は、小数点第2位以下を四捨五入。③④の数値は、小数点第3位以下を四捨五入。

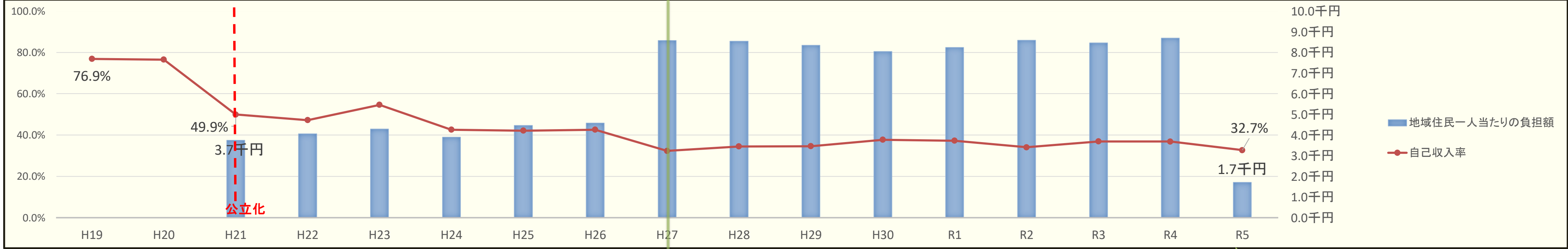


⑦各大学における特色ある取組、公立化時の目標の達成状況 : 別添参照

II. 経営見通し(収益性)に関する指標

	公立化2年前 H19	前年 H20	公立化初年度 H21	2年目 H22	3年目 H23	4年目 H24	5年目 H25	6年目 H26	7年目 H27	8年目 H28	9年目 H29	10年目 H30	11年目 R1	12年目 R2	13年目 R3	14年目 R4	15年目 R5
運営費交付金(A) ※1	1,060,661	1,010,847	2,509,253	2,194,214	2,279,911	2,480,633	2,318,642	2,471,943	4,485,803	4,476,502	4,463,892	4,247,522	4,309,794	4,331,849	4,404,245	4,447,090	4,404,970
自己収入等(B)			2,801,137	2,250,213	3,009,835	2,059,266	1,868,843	1,999,673	2,364,755	2,630,851	2,728,104	3,047,844	3,077,710	2,815,500	3,231,667	3,220,038	7,796,339
①自己収入 (B-C-D) ※2	3,522,661	3,299,536	2,503,871	1,962,710	2,748,472	1,842,579	1,690,002	1,833,584	2,144,379	2,357,464	2,360,994	2,574,395	2,557,736	2,240,685	2,580,223	2,594,528	2,142,346
資産見返運営費交付金等戻入 (C)			0	0	0	0	0	0	18,673	77,452	170,893	264,047	337,099	385,849	457,268	427,800	2,258,995
資産見返寄附戻入(D)			297,266	287,503	261,363	216,687	178,841	166,088	201,703	195,935	196,217	209,402	182,875	188,966	194,176	197,710	3,395,058
②収入(A+①) ※3	4,583,322	4,310,383	5,013,123	4,156,924	5,028,383	4,323,211	4,008,643	4,305,527	6,630,182	6,833,966	6,824,886	6,821,917	6,867,530	6,572,534	6,984,468	7,041,618	6,547,316
③公立大学法人の業務運営に関して住民等の負担に帰せられるコスト ※4	2,039	2,121	2,873,475	3,100,141	3,245,678	2,918,026	3,313,635	3,371,766	6,244,213	6,155,509	5,954,093	5,679,614	5,751,867	5,920,772	5,787,955	5,871,501	1,135,377
④人口 ※5	790,576人	782,626人	766,277人	764,456人	756,390人	749,460人	742,481人	735,125人	728,276人	720,907人	713,465人	705,880人	697,674人	689,785人	684,049人	675,710人	666,293人
自己収入率(①/②) ※6	76.9%	76.5%	49.9%	47.2%	54.7%	42.6%	42.2%	42.6%	32.3%	34.5%	34.6%	37.7%	37.2%	34.1%	36.9%	36.8%	32.7%
地域住民一人当たりの負担額(③/④) ※7	-	-	3.7千円	4.1千円	4.3千円	3.9千円	4.5千円	4.6千円	8.6千円	8.5千円	8.3千円	8.0千円	8.2千円	8.6千円	8.5千円	8.7千円	1.7千円

※1 学校法人時点は、私学助成金を計上
※2 学校法人時点は、(②収入)-(③公立大学法人の業務運営に関して住民等の負担に帰せられるコスト)
※3 学校法人時点は、帰属収入合計を計上
※4 学校法人時点は、設立団体からの補助金を計上
※5 高知県推計人口(高知県HP)
※6 令和3年度までの数値は行政サービス実施コスト計算書の自己収入等(運営費交付金、資産見返戻入を除く)を経常収益(資産見返戻入を除く)で除して整理したもの
※7 令和3年度までの数値は行政サービス実施コスト計算書の一会計期間における業務運営に關し、住民が負担する一人当たりのコストについて試算したもの
※8 平成27年度以降の数値は、高知県公立大学法人としての数値。平成27年4月1日付で、高知県公立大学法人(吸収合併継続法人)は公立大学 法人高知工科大学(吸収合併消滅法人)と合併。
※9 「自己収入率」・「地域住民一人当たりの負担額」は、小数点第2位以下を四捨五入。なお、「地域住民一人当たりの負担額」については、0.1千円以下を「-」表示。
※10 地方独立行政法人会計基準の改訂による資産見返負債の計上の廃止に伴い、R5は前事業年度末の資産見返負債は当期首に臨時利益として計上。



○各大学における特色ある取組、公立化時の目標達成状況

教育の質の向上及び地域貢献のための取組状況

【教育の質の向上のための取組状況】

・学部制から学群制への改編

公立大学法人化した平成 21 年度、工学部を 3 学群に改編し、専門分野だけでなく、幅広い関連分野を学ぶことができる「専攻・副専攻制」を導入した。これにより、幅広い知識の習得、専門分野に関連する領域の学び、専門分野を俯瞰する力などを習得するために必要な環境を整備した。平成 27 年度からは、既存のマネジメント学部を経済・マネジメント学群に改組し、令和 6 年度からは、工学的視点と社会に対する俯瞰的な視野の両方を兼ね備えた文理統合型の人材を育成することを目的に、新たにデータ＆イノベーション学群を設置した。

・時間割の 1～3 限への集約化

基盤となる知識の確実な定着と授業の質の向上のため、平成 25 年度から授業科目の厳選を進め、平成 27 年度からは主要科目を原則 1～3 限に配置することで、空いた 4、5 限を、学生の学修や生活状況に合わせ、自主学修や課外活動等の時間として活用できるよう、カリキュラム改編を進めた。平成 29 年度に運用開始し、空いた 4、5 限は演習時間として活用されているほか、資格取得や語学学習等、多様な自主学習活動を促進している。

・学部・修士一貫教育の推進

理工系において大学院進学率が高まりつつあること、企業等の技術系の採用において修士課程を修了した人材を求める傾向が強まっていることを意識し、平成 27 年度から学士課程と修士課程との接続を意識したカリキュラム整備を進め、学士課程における専攻及び修士課程におけるコースの再編を数度に分け行った。また、大学院進学に伴う授業料負担を軽減するため、進学前に採択を決定する授業料免除制度を平成 30 年度入学生から適用するよう創設、さらに、令和 3 年度入学生から、5 年間で修士課程までを修了できる制度を新設するなど、学生の大学院進学を促進している。

・工学系共通科目の設置

平成 26 年度から、工学技術者として工学全体を俯瞰する力を養うことを目的とした、「工学系科目」を設置している。さらに、授業内容や履修指導方法等多岐にわたって議論を重ね、工学全般の基礎理論・基礎概念を理解するための基盤科目群を令和 2 年度に見直し、社会の多様なニーズに応えられる高度な技術者を輩出する環境を整えている。また、令和 2 年度の見直しに合わせて、工学系の学群の卒業要件を見直し、自身の学群の学問分野以外の学修を推進する取り組みを行っている。

・国際交流機会の提供、語学学習支援

公立大学法人化以降、学生の国際交流機会を増大させる取組を進めている。半年～1 年の国際交流協定締結大学への派遣（科目履修・研究留学）、修士学生を対象とした海外大学への研究留学奨励プログラム、長期休暇を利用した海外短期研修の実施（語学研修含む）、国際学会での発表、海外協定校とのオンライン交流プログラム、国内での日本文化研修旅行（学内の留学生との交流を含む）の実施等である。それぞれに充実した経済的支援が行われており、希望する学生には、専門性や語学力のレベルに応じた多様な国際交流の機会が与えられる。また、TOEIC-IP 試験の学内での実施（年 4 回程度）等、英語コミュニケーション能力の向上を図る支援も強化されている。正課と課外の学習・活動を組み合わせ、指定された単位の取得、国際交流活動への参加、TOEIC スコアによりポイントを付与し、修了証を交付する「ジョン万次郎プログラム」も運用している。さらに高度な英語力を身につけ、豊富な国際経験をもつ学生には「KUT Youth Ambassador」が任命される。

・永国寺キャンパスの整備

高知県の要請により、平成 27 年度に高知県立大学・高知短期大学（令和 2 年度閉学）を擁する高知県公立大学法人と

法人統合、県内高校生の進学先拡充のため、ニーズがあった経済分野をマネジメント学部に加えるとともに入学定員を増員し、経済・マネジメント学群として改編したうえで、高知市中心部の永国寺キャンパスに2年生以上を移転した。永国寺キャンパスを「知の拠点」として再整備するという県の方針に沿い、平成27年度以降、教育研究棟を新築、地域連携棟、図書館、体育館、学生会館を改築して、環境整備を行った。永国寺キャンパスは高知県立大学と共有し、県民の生涯学習の場、地域連携の拠点、地域の災害拠点としても機能している。図書館は県民も利用できる。

・安価で安全な住環境の提供

開学時からあるドミトリーに加え、公立大学法人化以降、インターナショナルハウス（国際交流会館）、女子寮、スポーツ活動に取り組む学生向けの寮、永国寺キャンパスに通学する学生向けの寮を整備し、令和6年度は441名（学生全体の16.3%）が入居している。インターナショナルハウスは留学生と日本人学生が共同生活する寮であるが、1階の交流ホールでは、入居者以外の学生でも参加できる異文化交流のイベントが開催されている。

・部活動支援

公立大学法人化以降、部活動支援の拡充のため、専門指導者の招聘制度を実施するとともに、学生の経済的負担軽減策として課外活動支援バスを導入、現在は中型バス2台、マイクロバス2台を遠征等で利用している。スポーツ施設の整備も進め、全天候型テニスコートの設置、フットサルコート及び野球場の建設を行った。

【地域貢献のための取組状況】

・地域連携機構の発足

公立大学法人化を契機に、地域との連携を一層強化するため、地域連携機構を発足。「専門性に基づいた社会と地域への貢献」をスローガンに、先端研究を地域に活かす「連携研究センター」、分離統合による社会シミュレーションと政策・経営ソリューションの創造を目指す「社会マネジメントシステム研究センター」、地域連携機構の活動の社会実装に向けた体系化を目指す「社会連携センター」、地域の暮らしや文化の価値を再発見し、次の世代の育成や持続可能な地域社会の継承に向けた試みに挑戦する「地域共生センター」、地域教育との連携を課題とする「地域教育支援センター」により、地域連携・地域貢献に取り組み、平成27年度の高知県立大学・高知短期大学との法人統合以降は、高知市中心部にある永国寺キャンパスにも拠点を設け、連携を強化してきた。

令和元年度からは、これまでのセンター制を見直し、地域に根付くような「産業育成」、インフラや防災などの「都市マネジメント」、里山生活を工学的にサポートする「里山創成」という3つのゆるやかな枠組みであるユニットを中心として活動する体制に発展的に移行し、柔軟に連携して研究者個々の専門性を様々な形態で活かせる場や機会を多く創る体制を整えた。さらに、これらの研究ユニット群と横断的に連携する組織として、研究ユニットと地域産業、地域行政、地域社会との連携を円滑にする役割を担った「社会連携センター」、地域での教育を総合的にサポートする「地域教育支援センター」を引き続き附置した。

令和4年度には、地域活動や業務等での経験で培われた高い見識を持ち、地域が抱える課題解決等を目的とした活動に対する高い意欲を持つ地域の方々を、地域連携アドバイザーとして委嘱し、本学シーズによる地域課題解決に資する研究活動を加速促進させることを目的とする制度を設けた。

・高知県産学官民連携センター（ココブラ）との連携

高知県が、産学官民が連携して行う産業振興や地域の課題解決に向けた様々な取組みを推進するため、永国寺キャンパス内に設置した高知県産学官民連携センター（ココブラ）に3名のコーディネーターを派遣し、また、県内の5大学等と高知県で構成する高知県・大学等連携協議会に参加し、高知県における産学官民連携推進の取組みに積極的に参画している。

地域貢献に関する目標の達成状況

・地域連携・地域貢献

公立大学法人化を機に地域との連携を一層強化することを目的に設置した地域連携機構を中心に、地元企業などとの連携を積極的に行い、本学の教育研究を基にした専門性に基づいた地域貢献を行っている。地域連携・地域貢献に関する成果の一例として、以下の実績があがっている。

産官との共同・受託研究、補助金プロジェクト

・液状氷である「スラリーアイス」を用いた生鮮魚類の鮮度保持や凍結濃縮技術の開発（スラリーアイス製造装置の研究開発は平成 26 年度文部科学大臣表彰科学技術賞、四国地方発明表彰、日本弁理士会会長奨励賞、第 6 回モノづくり連携大賞などを受賞、凍結濃縮技術の開発は平成 24～26 年度経済産業省戦略的基盤技術高度化支援事業に採択、その他、科学技術振興機構、四国経済産業局、高知県、県内企業等から多数の補助を受けている）、またスラリーアイスに関しては、平成 26 年度～平成 30 年度高知県産学官連携事業化支援事業に採択され、株式会社コアテック（高知県南国市）とともに「連続式次亜塩素酸スラリーアイス生成装置」を開発した。

・文部科学省気候変動適応技術社会実装プログラム（S I - C A T）に採択され、気候変動により複雑で困難になりつつある地方自治体の防災対策に対応した取り組みとして、高知県や徳島県に所在する自治体と防災研究や政策立案を協働で実施。気候変動予測データに基づき最大規模の洪水をデジタルで再現し、各地での氾濫シミュレーションや被害予測等を行うことで、水災害リスク分析や防災政策立案等の支援を行った。

・球状多孔質無機酸化物ナノ粒子（MARIMO）の大量合成技術開発及び実用化研究：平成 23 年度に本学で発見したメソ多孔体のナノ粒子の大量合成技術確立に向けて、宇治電化学工業株式会社（高知市）と共同研究を開始。平成 25 年度に高知県産学官連携産業創出研究推進事業に採択され、産学官連携による共同研究を開始し、平成 28 年度に大量合成技術確立に成功。同社と包括的連携協定を締結し組織間による、全く新しい粉体・スラリー製品の事業化を加速した結果、令和 2 年度には、歯科材料メーカーの YAMAKIN 株式会社（高知県香南市）が、歯科材料としての製品化に成功し MARIMO を利用した商品化第 1 号創出に至った。今後も触媒担体をはじめ高温耐性触媒、分析試薬、リチウムイオン電池負極材、化粧品等の実用化を目指した多岐に亘る応用研究を実施中

・幅広い藻類に対して迅速に細胞死を誘起できるシアノアクリレートナノ粒子の殺藻機構解明による、より安心・安全で効率の良い藻類増殖防止剤・殺藻剤の開発（高知県補助事業、県企業との共同研究）

・高知大学、香川大学、高知県立大学等と連携し、文部科学省課題解決型高度医療人材育成プログラムの採択を受け、「地域医療を支える四国病院経営プログラム」を実施。医療従事者が経営やマネジメントを学ぶ機会を創出することで、病院経営の課題に対して突破力を持つ人材の育成を図った。

・内閣府「平成 30 年度地方大学・地域産業創生交付金」の採択を受けて、NEXT 次世代型施設園芸農業への進化に向けた研究（基礎研究、応用研究）を高知県、高知大学、高知県立大学と実施。令和 5 年度には同事業展開枠に「I o P が導く「Society5.0 型農業」への進化の実現に向けた、研究開発の推進」として採択され、引き続き園芸ハウスの統合管理システムや果菜類の検出精度を高める画像認識技術、農作業の省力化を実現する作業支援ロボット等の研究開発を推進中。

・ユズ熟練農業者の栽培管理技術の指標化と適正着果に関する研究（高知県補助事業、企業との共同研究）や、適正な着果量管理によるユズ果実の高品質・生産安定化、最新情報技術を用いた着果数、葉数把握による収量予測に関する研究（高知県北川村との共同研究）を実施した。

本学の研究成果等を活用した新技術の開発、新事業・新産業の創出

- ・地域の未利用資源を活用した再生可能エネルギー、木質バイオマスによる発電事業、四国初の木質バイオマス専焼発電所の設立を通じ、地域社会の持続的発展を推進
- ・総生産の減少、津波災害を危惧した震災前過疎の兆候等が見られる高知県黒潮町が、若者の雇用機会の創出を目指し産学官連携で進める新産業創造プロジェクトに、プロジェクトプロデューサー及びプロジェクトマネージャーとして大学が参加、地域の特性を活かした新産業創出の第1弾として、「毎日食べたい非常食」をキーワードとした缶詰商品をプロモートし、黒潮町缶詰製作所の設立、利益確保、拡大再生産による雇用拡大を支援。
- ・前田建設工業株式会社と有限会社サットシステムズ（高知市）との共同開発により、日々状況が変化する建設作業所において、自動で資機材を認識し荷取りできる機能や、荷置場の空きスペースを判断して所定の場所に荷置きできる機能を持つ「建設作業所で活躍する資機材の無人搬送ロボット」の開発に成功
- ・国立研究開発法人情報通信研究機構（NICT）、株式会社シティネット（高知市）、合同会社 Office asoT（高知市）と「中山間地域における端末間通信技術を活用した圃場データの効率的な収集」に関する共同研究を実施
- ・農作業の省力化を実現する農作業支援ロボットとして、有限会社サット・システムズ（高知県高知市）、株式会社土佐ひかり CDM（高知県四万十町）と、「ニラ出荷支援作業ロボット」の開発、商品化に成功。有限会社サット・システムズとは、「花卉定植支援ロボット」についても、社会実装を視野にした共同研究を推進中である。
- ・AI による画像処理技術を用いて、エムセテック株式会社（高知県須崎市）と共同でシリコン単結晶育成における結晶線判別技術を開発。
- ・地域公共交通の運行管理システムとして、予約管理システムと乗降者数カウントシステムを開発。複数の県内自治体（土佐清水市、香南市、佐川町）で運用開始。他の県内自治体でも運用が予定されている。

地域の課題解決

- ・過疎地の実態に即した地域公共交通を検討するため、データ収集による現状把握、課題の整理・抽出・分類を行い、実証実験を経てコミュニティバス路線を合理的に再編し、利用者の利便性向上を図った取組み（高知県田野町、佐川町、安田町）
- ・脳ドックデータを活用し、高齢ドライバーの危険運転行動と脳の関係を明らかにして、健康寿命と運転寿命の同時延伸により、超高齢化社会を活性化する取組み（高知県田野町）
- ・本学近隣の地区を対象とし、科学技術をベースとした里山の再生手法と信頼できるコミュニティの拡大手法を現実の社会に実装することを目的に、「里山工学」を立ち上げ、研究・提案を推進
- ・自治体の行政サービスの ICT 化を推進するため、令和2年度に学生と自治体職員がプロジェクトチームを組み、AIチャットボットの構築や、LINE 公式アカウントの構築提案など、大学と連携した DX 人材の育成に取り組んだ。（高知県香美市との取組は、総務省「自治体 DX 推進手順書参考事例書」に掲載された）
- ・学生のボランティア活動への参加を、地域をフィールドにした実践的な学びの場であると考え、その活動を支援するために、コミュニティサービスラーニングの受付窓口を設置し、登録されている学生および学生団体にボランティア活動の情報を提供した。
- ・学生団体「WAvert」は、高知県香美市を中心とした古民家改装やアップサイクル活動を実施。また、情報学群の学生を中心としたサイバーボランティア団体「Cykut」は、2015年度より高知県警察本部より「高知県サイバー防犯ボランティア」の委嘱を受けて、インターネット上の違法・有害情報のパトロール活動や、県内小中高校に対するサイバー犯罪の被害防止のための教育活動や広報啓発活動を実施。

、学生団体商品開発部は、人・地域・高知県を盛り上げることを目的として、高知県特産品「文旦」の廃棄部分である皮を使用した「文旦ハニージャム」を有限会社龍馬の里（高知県香南市）と共同開発を進め、商品化に成功した。さらに、高知県地場産品を使用したウクライナ料理の防災缶詰を株式会社黒潮町缶詰製作所（高知県黒潮町）と共同開発。売上金のうち収益全額をウクライナ避難民の人道支援を目的として「高知ウクライナ友の会」に寄附をした。この「ウクライナ支援缶詰」は「一般社団法人未来の食卓 未来の食卓アワード日本缶詰大賞 優秀賞」「香美市ものづくり大賞 次世代賞」を受賞。

- ・令和4年12月にニュービジネス協議会、しあわせ推進協議会、高知工科大学社会マネジメントシステム研究センターの3社がDX研究開発に関わる協定を締結。DXシステム開発に関わるコンシェルジュ実験を行い、大学の教員がコンシェルジュの役割を果たすことで企業側がIT専門家を使うことで具体化具体的なDXシステム開発に関する活動を実施

- ・中山間地域における農業用水の漏水検知等のため、電源供給が困難な場所でも低コストで運用可能となる水位通知システムを、合同会社 Office asoT、株式会社シティネット（いずれも高知市）との共同研究により開発

- ・室戸海洋深層水を利用し、エネルギーロスの少ない新製塩システムにより、天日塩と同品質の食塩を短期間で製造可能な技術を室戸海洋深層水株式会社（高知県室戸市）と共同開発し、実用化に成功した。更にこの基礎技術を発展させ、同社、四国電力および本学は、平成28年度省エネ大賞（省エネ事例部門）の資源エネルギー庁長官賞（共同実施分野）を受賞。令和2年度より同社、高知県工業技術センターと海水高濃度装置等の共同開発を推進中

災害対策への貢献

- ・巨大海底地震発生時に海面上で発生し音速で到来する超低周波音を感知することで、津波到達前にその方向性・規模を迅速・正確に把握する「複合型インフラサウンド津波センサー」を企業と共同開発、黒潮町、土佐清水市、室戸市、東洋町等高知県内の14か所にセンサーを設置して実証実験中

- ・浦戸湾の、入口の狭い特殊な地形を利用した防災対策「三重防護」の工事の実施を決定した高知県地震・津波防護技術検討委員会の座長を本学学長が海岸工学の専門知識を活かし務め、貢献。工事は、平成29年度に本格着工し、15年間で完成予定

- ・南海トラフ巨大地震に備え、高知県内の主要な13病院の医療データを一か所に集め、東日本に設置するサーバーへのバックアップが可能となる安全で確実な医療情報ネットワークを構築した。これにより高知県民7割の医療データを集約することに成功した。

- ・高知港海岸景観・利便性等検討会に本学教員が参画し、高知市の種崎千松公園地区に建設予定の津波防波堤防において、堤防と公園が一体化し、高さや圧迫感・閉塞感を感じさせず、景観と機能が両立したデザイン設計を実施。

地域の初等・中等教育への貢献

- ・高知県、高知市及び香美市教育委員会、高知県内の初等・中等教育機関と密接に連携し、県内の小中学校、高校において本学教員による訪問教育を実施しているほか、県内の小中学生、高校生を対象とした科学実験、ものづくりに関する授業や研究発表会、数学的な見方や考え方、思考力を培う数学コンクールを開催

- ・令和4年度、高知工科大学と高知県教育委員会がデジタル教育連携に関する協定を締結。デジタル教育分野で相互に密接な連携及び協力を行うことにより、両者の教育及び研究の充実及びデジタル社会で活躍することができる人材の育成に寄与することを目的としている。

公開講座等による地域生涯学習支援

- ・総務省、農林水産省等の政府職員、全国の地域活性化に従事する方、研究者等を招聘し、中山間・地方都市の問題を解決するためのビジネスモデルの創造を考える経済・マネジメント学群の専門科目「地域活性化システム論」を公開講座として毎年度定例的に開催
- ・県や地方自治体の公共政策担当者や地域活性化に貢献している方を講師として招聘し、参加者と意見交換ができる場として「地域連携カフェ」を定期的に行う開催、市民の参加を呼びかけ
- ・大学の地域課題に関する研究やその成果を地域の方々に報告、共に考察することで、地域との交流や連携を図る「イブニングセミナー」や「地域連携セミナー」を定期的に行う開催、市民の参加を呼びかけ

・高知県内出身学生の支援

公立大学法人化直後の平成 22 年度入試以降、全学的に、年内入試（大学入学共通テストを課さない総合型選抜及び学校推薦型選抜）に高知県内学生枠を設け、県内学生の受け入れに努めている。たとえば、平成 27 年度に設置した経済・マネジメント学群は、推薦入試のほか、特別推薦入試、AO 入試、推薦特待生入試の特別選抜全体で、高知県内学生枠を設けており、特別選抜が学校推薦型選抜と総合型選抜に分かれた令和 3 年度入試以降も同規模の高知県内学生枠を設定した入学試験を継続して実施している。令和 6 年度学士課程入試については、高知県内から 179 名（入学者の 27.8%）の入学者があった。

令和 7 年度入試では、総合型選抜入試（システム工学群、理工学群、情報学群、経済・マネジメント学群、データ&イノベーション学群）において 100 名の高知県内学生枠（昨年比 10 名増）を設定し入学試験を実施した。試験の結果、109 名（昨年比 12 名増）の高知県内学生の入学が決定している。また、県内出身学生の入学料は他県出身学生の半額に設定し、さらに、経済的理由のため大学進学を断念せざるを得ない優秀な学生を支援する特待生制度や、高校在学時、生活保護世帯であった県内出身学生の授業料等を 4 年間免除する制度を継続して実施し、県内の支援が必要な学生の進学をサポートしている。

上記のような入試改革や学部新設・改組等の不断の努力により、平成 22 年度に 127 名であった高知県内入学者が令和 6 年には 1.41 倍の 179 名となっている。他県と比べ人口が少なく、さらには 18 歳人口減も加速する高知県において、本学が着実に県内進学者の受け皿としての機能を拡大していることがこのような数字からも確認できる。

・高知県内への就職支援

県内企業への就職を促進するため、高知県や県内の産業界等との連携を強化している。具体的には、県内企業及び県との連携・協力により、業界研究セミナーを本格的な就職活動開始前に実施して、学生に県内企業の魅力を伝える環境を整え、また県内に勤務地を有する国家・地方公務に関する業務セミナーを開催、さらには県内企業によるインターンシップマッチングセミナー（夏期・冬期）への参加促進等の取組みを行っている。高知県及び県内企業との協力・連携による就職支援を進めた結果、令和 5 年度の県内就職者は学部 55 名（15.6%）、修士 5 名（4.9%）であった。